

ベンヤミン、丸山、バーリン、そして中国思想界近況一瞥

王 前

今年六月の末、中国最大の経済都市である上海で、日本、米国と中国を代表する大学によるベンヤミン・シンポジウムが開かれた。日本からは東京大学の小林康夫教授が率いるチーム、米国からはニューヨーク大学比較文学部教授の張旭東氏（フレドリック・ジェイムソンの高弟、ベンヤミンの中国語訳を最も早く手がけた一人）と比較文学研究や翻訳などで著名なリチャード・シーバース氏が参加し、会場となったのはここ数年間、文化・思想研究が大変盛んで、ハーバーマスやチャールズ・テーラーなどの欧米の大学者や思想家を頻繁に講演などに招いている華東師範大学で、そのチームを率いるのは中国現代思想史、知識人研究で優れた業績を挙げた許紀霖教授である。シンポジウムの主題はベンヤミンと都市文化で、日、米、中三国の学者はさまざまな角度からベンヤミンと都市文化研究の関係を論じ、大変有意義な議論がなされた。ヨーロッパ以外の土地、それも中国で、日、米、中三国の学者がヨーロッパの思想家を議論するシンポジウムは空前絶後ではないが、確かに珍しいことである。小林教授がおっしゃったように、「ヴァルター」（小林教授用語。教授はシンポジウムでベンヤミンをそのように呼ぶのが好きだと出席者を笑わせた。因みに中国では「ヴァルター」と言えば、旧ユーゴの第二次世界大戦中のゲリラ戦を描いた映画の主人公、ゲリラの逞しいリーダーの名前としてよく知られている）も地下で喜んでいるだろう。このような学術活動から窺い知れるのは、経済発展が著しい中国では、まだ再開から日が浅いとはいえ、外国の思想文化研究も着実に展開されていることであろう。筆者はここでベンヤミン、丸山眞男、バーリンをめぐる最近の中国思想界の動向を少し紹介したい。

周知のように、一九四九年以降の中国大陸ではマルキシズムがイデオロギーとして圧倒的な影響力を持っている。一九七〇年代の末からの、いわゆる思想解放の時代の中で、当時の中国が直面した問題が思考される中、ルーツが同じである欧米のマルクス主義の諸流派に自然に目が向けられ、その中で特にフランクフルト学派へ高い関心が持たれ、その紹介や翻訳が始まったのである。例えば、エーリッヒ・フロム、マルクーゼ、アドルノ及びホルクハイマーの代表作などが訳されている。そういった翻訳の中に、ベンヤミンのも入っていたが、最初に出た彼のまとまった翻訳は、筆者の記憶では、*Charles Baudelaire. ein Lyriker im Zeitalter des Hochkapitalismus* の中国語訳である（中国語訳のタイトルは、『発達資本主義時代的抒情詩人』、北京三聯書店出版、一九八九年）。薄っぺらな小冊子ではあるが、当時の中国ではまだ外国の学術著作の翻訳が少なかったため、発売後多くの若き学徒や芸術家に迎えられ、版を重ねてきた（その翻訳は当時中国の学界で一世を風靡した「現代西方学術文庫」に入っていた。文庫という名が付いているが、日本の文庫とは意味が違って、大

型叢書である。因みに同じ文庫に日本人の著作も一冊入っていた。堺屋太一氏の『知価革命』である)。当時の洋学に深い関心を持っていた学者や文人たちに好まれていたベンヤミンのこの翻訳が出た後、中国は急激に市場経済に突入し、ベンヤミンの思想を理解する客観的な条件が少しずつ整ってきたと言える。とはいえ、ベンヤミンに関する研究は長い間特に進んでいなかった。主要な著作の翻訳も数年前までほとんど出ていなかった(最近の数年間『パサージュ』の部分訳や『ベンヤミン文選』などいくつか新しい翻訳が出ている)。今回上海で開かれたベンヤミンをめぐるシンポジウムを振り返ると、中国側の参加者には、現代文学研究者やカルチュラルスタディーズを専門としている学者が多く、彼らはベンヤミンと都市文化との関係に非常に関心を持っていて、研究にベンヤミンの理論を援用している。例えば、主催側の司会者の一人、気鋭の文学評論家の羅崗氏の話では、一九三〇年代の上海で作られた映画作品をベンヤミンの理論で分析すると、今まで見えてこなかったものがよく見えてきて、だいぶ理解を深められたそうである。日本のベンヤミン受容とは違う様相を呈しているが、そのうちにベンヤミンの中国における受容はさらに深化していくだろう。それはいまの中国では市場経済がさらに発展していくこととも連動しているからである。

ベンヤミンより少し遅れて中国で紹介された著名な外国の思想家の一人は二十世紀日本を代表する思想家、政治哲学者の丸山眞男である。最初に翻訳されたのは、丸山の単行本ではなく、「福澤諭吉与日本近代化」(「福澤諭吉と日本の近代化」の意味で、上海学林出版社、一九九二年出版)である。この論文集の翻訳をしたのは、在日の中国人研究者で、丸山に親炙したこともある区建英氏である。後に丸山の福澤諭吉関係の主要論文集が一冊にまとめられ、岩波文庫に入れられたことを考えると、この中国語訳はその先駆けとも言えそうな存在である。学術書の出版が困難だと言われている昨今の中国で、一九九七年にこの論文集は装を新たにして『日本近代思想家福澤諭吉』というタイトルで、国際関係等に関する書物の出版で有名な世界知識出版社によって再度江湖に送り出されることになった。その後、丸山の主著のひとつ、『日本政治思想史研究』が外国の思想学問の質の高い紹介や翻訳で有名な三聯書店(前出の「現代西方学術文庫」を出版しているところ)によって、「学術前沿」(The Frontiers of Academia)の一冊として、レヴィ = ストロースの『悲しき熱帯』や西洋古典学の権威であるピエール・ヴェルナンの自伝『神話と政治の間』などと一緒に出された。初版からは既に半世紀以上経っているので、学術フロンティアとは言いがたいが、現代日本の学問思想を紹介するという意味では、確かに先駆的な仕事と言えよう。これらの出版と相伴って、丸山の中国語訳は何人もの中国の著名な学者によって書評され、彼の思想への共鳴が示されている。特に一九七九年に創刊以来、ずっと中国の言論界で大きな影響力を持っている思想文化総合雑誌『読書』(英国の *TLS* や米国の *New York Review of Books* を多くの面で手本にしたと言われる総合誌)でも何回も取り上げられ、中国の知識人の間での丸山への親近感の強さが読み取れる。それだけでなく、中堅の思想史研究者の論文などでも丸山への言及がよく見られる。昔はソ連、今は目を欧米に向けている人が多

い中国の学界で、なぜこのような丸山への共鳴があるのか、筆者から見れば、次のような原因があるのではないかと考えられる。

まず言えるのは、課題の共通性であろう。近代化は日中の十九世紀後半からの共通の課題であり、先に近代化を成し遂げた日本の知識人は近代化をどう考えているのか、関心を持っている中国の知識人は多い。これはある意味では近代化を最も早く実現した西欧諸国や米国より、日本のほうにもっと親近感を感じられる。多くの中国人の学者が丸山について書いた感想を読むと、共通しているのは、丸山の著作を読んであまり隔たりを感じないことである。言い換えれば、丸山が批判した問題の多くは中国の問題にもそのまま通じるので、欧米の思想家よりも強く共鳴できるわけである。清朝末期以来ずっと近代化を自分たちの思索の課題にしてきた多くの中国の知識人にとって、近代化は一種の至上命題である。そのために、進化論からマルクス主義まで、諸外国からさまざまな思想やイデオロギーを導入し且つ実験してきたのである。理論的な探求だけでなく、その理想のために甚大な犠牲も払ってきたのである。にもかかわらず、その通った道は紆余曲折で、決して平坦ではなかった。あたかも地上の天国の出現が約束されたような時代に入った後、多くの蛮行を許した未曾有の「文化大革命」まで行われた。これらの問題はどうか考えればいいのか、歴史の教訓はどう総括すべきなのか、そういった問題意識は文革が終わって改革開放（中国語では「門戸開放」の意味）の時代に突入した中国では、多くの知識人に共有され、彼らの脳裏を去来したものである。そういう歴史的な転換期の中で、一九八〇年代の中国は新たな啓蒙の時代に入ったわけである。冒頭で触れたベンヤミンの著作の中国語訳が収められている「現代西方学術文庫」を代表とする多くの翻訳叢書の出版はまさに新たな処方箋を求めるための重要な一環といえる。そういった推移の中で一九九〇年代の初頭、丸山が中国に紹介されたのである。「独立不羈」を信じた福澤諭吉に「いかれていた」丸山を思想を紹介するのは、直接的ではないにしても、本質的には中国の課題への示唆が多いはずである。「近代的思惟」とは何かを生涯の課題にした丸山の知的営為は実に多くの面で中国の知識人にとって参考にできるものがある。

もう一つ中国の学界にとって、丸山が魅力的なのは、その知的世界のスケールの大きさだろう。つまり普遍的な思考を目指す丸山の思索は、単なる日本の思想資源ではなく、まさに和、漢、洋の思想や学問を自家薬籠中のものにしてさまざまな葛藤の中で生まれたものである。丸山と対話したことがある現代中国を代表する思想家、一九八〇年代の思想解放運動の中で、絶大な影響力を誇っていた李澤厚氏も丸山の洋学の造詣を非常に高く評価している★1。

丸山の著作の中国語訳は前述のほか、計画中のものもいくつかあると聞いている。日本語の文献を読む中国の学者が彼の著作から多く学んでいる現状を考えると、丸山は既に日中間の知的架け橋となっているといっても過言ではない。「ヴァルター」と同じく、お墓の中でこのことを知ったら丸山も喜ぶはずである。実際、最晩年の丸山は中国の進歩に大きな期待を持っていただけでなく、福澤の唱える理想が中国でも実現されることを祈って

もいたのである。

丸山とも親交があった、ユダヤ系イギリス人哲学者のバーリンも丸山とほぼ同じ時期に中国で紹介され始めた。最も早くバーリンの思想を中国で紹介したのは、前出の中国の新しい啓蒙運動に大きく貢献した『読書』である（一九八九年五月号）。当時「現代西方学術文庫」の編集長を務めた少壮洋学派リーダー格の甘陽氏の手による論文がバーリンの思想の真髓を細かく解説しており、その中で紹介されたバーリンの真善美三位一体論への手厳しい批判に、当時読んだ筆者は非常に感動し、今日でも深く印象に残っている。残念なことに、イギリスの著名なジャーナリスト、哲学者のブライアン・マギーが編集した *Men of Ideas*★2 を除いて、当時の諸般の情勢の影響もあって、バーリンの翻訳は出ずじまいだった。中国の一般読者がバーリンの著作を読むにはもうしばらく待たざるをえなかった。

一九九〇年代の半ば頃から、もともとは文学作品の優れた翻訳で有名な南京にある出版社、訳林出版社が大型の人文系翻訳シリーズ「人文与社会訳叢」を打ち出した。このシリーズのカタログを見た限りでは、なかなか範囲が広く、今日欧米の人文・社会科学関係の名著を網羅する勢いすら感じられる。例えば、日本でもよく知られているチャールズ・テーラーの既に古典的な名著となっている分厚い *Hegel* と *Sources of the Self* なども入っている。バーリンの翻訳を見ると、なんと十冊近くこの叢書に入っている★3。本のタイトルを見ていると、あの名だたる『自由論』はもちろんのこと（翻訳は原書最新改訂版に基づく）、『ロシアの思想家』、『自由及びその裏切り』、『時代の流れに反して』など、バーリンの代表作及び亡くなった後、彼の献身的な優れた編集者ヘンリー・ハーディ氏の編集による「新著」もどンドン中国語に訳されている。書くことを毛嫌いし、寡作で有名なバーリンのことではあるが、続々と中国語訳が出ている事実を目の当たりにして、当然聞きたくなることが一つあるだろう。即ち、なぜ中国でバーリンが売れるのか？ バーリンは生前中国のことに言及したことはほとんどなく、彼の生涯の最後の文章は中国の学者に請われて書いた短い思想自伝 (*My intellectual Path*) という唯一の接点があったが、基本的に中国とは無縁だった思想家である。一九八〇年代に李澤厚氏や他の中国の学者はよく思想家は二つのパタンに分けられるというバーリンの分類（ハリネズミタイプと狐タイプ）を引用していたが、本格的な紹介は前述の甘陽氏の論文を除いて、皆無だったといえる。そのようなバーリンと中国の思想界との間になにが媒介として存在しているのか？ これは外国の思想文化とその輸入と移植を考える上で甚だ興味深い問題である。

筆者から見れば、確かにバーリンは具体的に中国のことに言及したこともないし、中国のために助言したこともない。しかし、彼の思想の中核となっているものは、中国の問題とかなり重なっている部分がある、この事実に注目していただきたい。バーリンが亡くなった後、ある中国の学者の書いた追悼エッセーによると、まだバーリンの翻訳が出ていなかった一九八〇年代の初期と半ば頃、中国の大学の中ではバーリンの『ロシアの思想家』等の代表作が大変流行っていたそうである★4。なぜならば、バーリンが書いたのはロシアのことではあるが、中国の近代史ともつき合わせて読めるからである。バーリンの両親は

ロシア革命の嵐から逃れるために、イギリスに移住したユダヤ人である。当時バーリンは十歳ぐらいの子供だったが、暴力の凄まじさを既に目撃し、その印象は生涯彼に暴力への嫌悪感を植え付けたのである。それ以降、新しいオックスフォード哲学、日常言語学派の創始メンバーの一人でありながら、彼は常にロシアの文化や政治に深い関心を持っていた。直接ロシア或いはソ連の名前が付いた書物は二冊もあり、欧米の哲学者の間では珍しい存在である。政治哲学者としてのバーリンを評価する場合、彼のロシア研究を抜きにしては成り立たない。言い換えれば、ロシア研究は彼の重要なホームグラウンドだったのである。彼自身の言葉で言えば、十九世紀ロシアの思想家、革命家のゲルツェンが彼の最も尊敬した人物であり、彼のヒーローである。ゲルツェンは中国でもよく知られているロシアの思想家・文筆家の一人である。バーリンの紹介によって欧米でもよく知られるようになったゲルツェンの自伝『過去と思索』は、最初中国では部分訳しか出なかったが、一九九〇年代に全訳本が出ていて、最近挿絵付きの新装版まで出ている。周知のように、中国革命はロシア革命の影響を強く受けた革命である。「以俄為師」（「俄」はロシアの略称、「ロシアを師とする」との意味）といったスローガンも出たほど、さまざまな分野でソ連を手本にした時代があった。ロシア文学は一時期中国ではまるで外国文学の代名詞であったほど、広く読まれていた。二年前に亡くなった中国現代文学の巨匠である巴金氏（一九〇四―二〇〇五）も若い時から革命者と文筆家を兼ねたゲルツェンに魅了され、その自伝を全部訳そうと考えていたそうである。そういったものは、バーリンを受容するときの素地になっていると考えられよう。

中国の現代史に照らして考えると、バーリンの諸論考は意外に多くの問題点を突いていることが分かる。例えば自由の問題。バーリンは自由を積極的自由と消極的自由の二つに分けることでよく知られている。決して消極的自由を無条件に擁護したわけではない、常に積極的自由の弊害を警戒するのがバーリン流自由論の真髄といえる。しかし、自由主義という言葉は中国では普通の文脈では決していい響きを持っていない。封建王朝が延々と二千年以上も続いたお国柄なので、自由という言葉自体、一時期はまるで諸悪の根源、社会を破壊するようなものと見られていた。個人の自由がいとも簡単に権力によって侵害される事例は中国の現代史上決して少なくなかった。そのような痛ましい歴史を持っている社会では、個人の自由とはいったい何なのかを思考することは、決して机上の空論ではなく、切実な課題である。特に「文化大革命」のような個人の自由や人権を蹂躪した時期のことを反省する時、バーリンの自由論及びその政治哲学は恰好の思想資源となるはずである。これはおそらく大勢の中国の読者がバーリンの思想に共鳴する最大の原因であろう。この時空を超えた思想と歴史及び現実との共鳴は如実にバーリンの思想の射程を物語っているだけでなく、思想の力を見事に証明しているとも言えよう（因みにバーリンの没後に出た論文集の一冊のタイトルは「*The Power of Ideas*」である）。いうまでもなく、バーリンの哲学は本人の言葉を借りて言えば、英米哲学とカント哲学が彼の思想を形作った。そのまま中国の文脈に持っていくのは無茶な面がないとは言えない。しかし、彼の個人の自

由をあくまでも擁護する姿勢、そのエラスムスの伝統につながるヒューマニズムの精神は、個人の自由や人権などの価値観があまり歴史を持たず、決して十分に定着しているとはいえないすべての社会にとっては、大いに価値があるに違いない。

学術書の翻訳は質の面では日本に及ばないところが多々あることは否めないが、数の面では日本に追いつきそうな勢いさえあると言えるぐらい、近現代の中国は欧米の思想の紹介に多くの精力を注ぎ込んでいる。最近のもう一つのブームは、カール・シュミットとレオ・シュトラウスの紹介と研究である。まさにバーリンや丸山とは対蹠的な思想家である。このようなさまざまな思想の紹介はいい刺激になるに違いないが、いかに消化すべきかは今後の課題となるだろう。紹介は所詮第一歩であり、重要なのはそれを批判的に研鑽し、十分に消化した上で、いかに定着させるかである。後者のほうはもっと時間がかかるだけでなく、慎重に選別する必要もある作業であろう。こういった面でも日本の経験は中国にとって大変参考になると筆者は考えている。

★1 李澤厚『世紀新夢』、八三頁、安徽文藝出版社、一九九八年初版。李澤厚氏の著作の日本語訳は二冊ある。『中国の伝統美学』と『中国の文化心理構造』で、二冊とも平凡社から出ている。

★2 中国語訳『思想家：当代哲学的創造者』、三聯書店、一九八七年初版、二〇〇四年第二版。日本語訳『哲学の現在：世界の思想家十五人との対話』／ブライアン・マギー編、磯野友彦監訳、河出書房新社。

★3 詳しいデータは、バーリンの編集者であるヘンリー・ハーディ氏が編集しているバーリン関係の文献を紹介しているサイトにも載っている (<http://berlin.wolf.ox.ac.uk/>)

★4 朱学勤『書齋裡的革命』（『書齋の中の革命』）、三六〇頁、長春出版社、一九九九年。